

### 3.3 階数の幾つかの定義とその同値性

定義 3.6 4 種類の階数 (rank) を定義しよう。  $A = (a_{ij})$  を  $(m, n)$  行列とする。行列の  $j$  列を縦

ベクトルと見たものを  $\mathbf{a}_j = \begin{pmatrix} a_{1j} \\ a_{2j} \\ \vdots \\ a_{mj} \end{pmatrix}$  と書き, 行列  $A$  は縦ベクトル  $\mathbf{a}_j$  を横に並べたものと考え,

$A = (\mathbf{a}_1 \mathbf{a}_2 \cdots \mathbf{a}_n)$  と書き表す事ができる。同様に行列の  $i$  行を横ベクトルと見たものを

$\mathbf{a}^*_i = (a_{i1} a_{i2} \cdots a_{in})$  と書き, 行列  $A$  は横ベクトル  $\mathbf{a}^*_i$  を縦に並べたものと考え  $A = \begin{pmatrix} \mathbf{a}^*_1 \\ \mathbf{a}^*_2 \\ \vdots \\ \mathbf{a}^*_m \end{pmatrix}$

と書き表す事ができる。

- (1) 行列  $A$  に基本変形を行ない対角成分以外を 0, 対角成分を 0 または 1 にした時の 1 の個数を  $\text{rank}_1(A)$  と表す。
- (2)  $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$  のなかの 1 次独立なベクトルの個数の最大値を  $\text{rank}_2(A)$  と表す。
- (3)  $\{\mathbf{a}^*_1, \dots, \mathbf{a}^*_m\}$  のなかの 1 次独立なベクトルの個数の最大値を  $\text{rank}_3(A)$  と表す。
- (4)  $I(A) = \{\mathbf{y} \in \mathbf{K}^m \mid \mathbf{y} = A\mathbf{x}, \mathbf{x} \in \mathbf{K}^n\}$  の次元  $\dim I(A)$  を  $\text{rank}_4(A)$  と表す。

定理 3.7 定義 (1), (2), (3), (4) は同じもの。

つまり,  $\text{rank}_1(A) = \text{rank}_2(A) = \text{rank}_3(A) = \text{rank}_4(A)$  である。この定理が証明された後はこれらと同じ  $\text{rank}(A)$  で表す。

$A_0 = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$  に対し定理 3.7 が正しいのは明らかであろう。だが, 一般の場合に定理 3.7

を証明するためには基本変形の性質を調べる事が必要になる。しかし,  $\text{rank}_2(A) = \text{rank}_4(A)$  はその知識がなくても証明できるので, それを最初に補題として証明しておく。

補題 3.8  $\text{rank}_2(A) = \text{rank}_4(A)$  が成立する。

証明  $A, \mathbf{a}_j$  を定義 3.6 と同じものとし,  $e_j$  を基本ベクトルとする。  $\mathbf{a}_j = Ae_j$  より,  $\mathbf{a}_j \in I(A)$  となる。ここで,  $\text{rank}_2(A) = r$  とする。  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r$  が 1 次独立としても一般性を失わない。  $\mathbf{a}_k (k > r)$  に対し,  $\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r, \mathbf{a}_k\}$  は 1 次独立ではない。よって  $\mathbf{a}_k = \beta_{k1}\mathbf{a}_1 + \dots + \beta_{kr}\mathbf{a}_r$  と表わすことができる。任意の  $\mathbf{w} \in I(A)$  に対し,  $\mathbf{w} = \alpha_1\mathbf{a}_1 + \dots + \alpha_r\mathbf{a}_r$  と書ける事を示せば,  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r$  が  $I(A)$  の基底となり,  $\text{rank}_4(A) = \dim I(A) = r = \text{rank}_2(A)$  がいえる。  $\mathbf{w}$  に対し  $\mathbf{x} \in \mathbf{K}^n$  が存在

して,  $w = Ax$  となる。  $x = x_1e_1 + \cdots + x_n e_n$  と書けるので,

$$\begin{aligned} w &= Ax = A(x_1e_1 + \cdots + x_n e_n) = x_1Ae_1 + \cdots + x_nAe_n \\ &= x_1\mathbf{a}_1 + \cdots + x_r\mathbf{a}_r + x_{r+1}\mathbf{a}_{r+1} + \cdots + x_n\mathbf{a}_n \\ &= x_1\mathbf{a}_1 + \cdots + x_r\mathbf{a}_r + x_{r+1}(\beta_{r+11}\mathbf{a}_1 + \cdots + \beta_{r+1r}\mathbf{a}_r) + \cdots + x_n(\beta_{n1}\mathbf{a}_1 + \cdots + \beta_{nr}\mathbf{a}_r) \\ &= (x_1 + x_{r+1}\beta_{r+11} + \cdots + x_n\beta_{n1})\mathbf{a}_1 + \cdots + (x_r + x_{r+1}\beta_{r+1r} + \cdots + x_n\beta_{nr})\mathbf{a}_r \end{aligned}$$

となり, よって補題は示された。 ■

定理 3.7 を示すために次の補題を示す。

補題 3.9  $P, Q$  を基本行列とする時,

$$\begin{aligned} \text{rank}_2(QA) &= \text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A) \\ \text{rank}_3(QA) &= \text{rank}_3(AP) = \text{rank}_3(A) \end{aligned}$$

が成立する。

略証 同様にできるので,  $\text{rank}_2(QA) = \text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A)$  だけ証明する。  $\text{rank}_2(A) = r$  とすると,  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_r$  が 1 次独立としても一般性を失わない。この時  $Q\mathbf{a}_1, \dots, Q\mathbf{a}_r$  が 1 次独立である事を示す。  $\alpha_1 Q\mathbf{a}_1 + \cdots + \alpha_r Q\mathbf{a}_r = \mathbf{o}$  とすると  $Q(\alpha_1\mathbf{a}_1 + \cdots + \alpha_r\mathbf{a}_r) = \mathbf{o}$  なので  $Q^{-1}$  を両辺にかけると  $\alpha_1\mathbf{a}_1 + \cdots + \alpha_r\mathbf{a}_r = \mathbf{o}$  得る。これより  $\alpha_1 = \cdots = \alpha_r = 0$ 。よって  $\text{rank}_2(QA) \geq \text{rank}_2(A)$  である。同様の議論を  $Q$  に代えて  $Q^{-1}$  を用いることにより  $\text{rank}_2(QA) \leq \text{rank}_2(A)$  を得るので  $\text{rank}_2(QA) = \text{rank}_2(A)$  は成立する。

$AP = (\mathbf{b}_1 \cdots \mathbf{b}_n)$  とおく時, 次の 3 つの場合について示せばよい。

(1)  $P = P_n(k, \ell)$  の時,

$$\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k, \dots, \mathbf{b}_\ell, \dots, \mathbf{b}_n = \mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_\ell, \dots, \mathbf{a}_k, \dots, \mathbf{a}_n$$

(2)  $Q_n(k; \lambda)$  の時,

$$\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k, \dots, \mathbf{b}_n = \mathbf{a}_1, \dots, \lambda\mathbf{a}_k, \dots, \mathbf{a}_n$$

(3)  $R_n(k, \ell; \alpha)$  の時,

$$\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_k, \dots, \mathbf{b}_\ell, \dots, \mathbf{b}_n = \mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k, \dots, \alpha\mathbf{a}_k + \mathbf{a}_\ell, \dots, \mathbf{a}_n$$

(1), (2) は明らかに 1 次独立なベクトルの最大個数は同じであるので  $\text{rank}_2(AP) = \text{rank}_2(A)$  は成立する。(3) の場合最初に  $\text{rank}_2(AP) \geq \text{rank}_2(A)$  を証明する。  $\text{rank}_2(A) = r$  とし  $\{\mathbf{a}_{\alpha(1)}, \dots, \mathbf{a}_{\alpha(r)}\}$  が 1 次独立であるとする。  $\alpha(\ell') = \ell$  となる  $\ell'$  が存在しない時は  $\{\mathbf{b}_{\alpha(1)}, \dots, \mathbf{b}_{\alpha(r)}\}$  も 1 次独立である (実際同じもの)。よって 1 次独立なベクトルの組は必ず  $\mathbf{a}_\ell$  を含んでいる事を仮定する。  $\alpha(\ell') = \ell$  となる  $\ell'$  が存在する時は  $\ell' = r$  としても一般性を失わない。  $\{\mathbf{a}_{\alpha(1)}, \dots, \mathbf{a}_{\alpha(r-1)}, \mathbf{a}_\ell\}$  が 1 次独立であるとする。  $\mathbf{a}_k = \alpha_1\mathbf{a}_{\alpha(1)} + \cdots + \alpha_{r-1}\mathbf{a}_{\alpha(r-1)}$  と書けないとき,  $\{\mathbf{b}_{\alpha(1)}, \dots, \mathbf{b}_{\alpha(r-1)}, \mathbf{b}_k\}$  が 1 次独立になり仮定に反する。  $\mathbf{a}_k = \alpha_1\mathbf{a}_{\alpha(1)} + \cdots + \alpha_{r-1}\mathbf{a}_{\alpha(r-1)}$  と書けるとき  $\{\mathbf{b}_{\alpha(1)}, \dots, \mathbf{b}_{\alpha(r-1)}, \mathbf{b}_\ell\}$  は 1 次独立である。よって  $\text{rank}_2(AP) \geq \text{rank}_2(A)$  が分かる。  $\mathbf{a}_\ell = -\alpha\mathbf{b}_k + \mathbf{b}_\ell$  なので,  $\mathbf{a}_i$  と  $\mathbf{b}_i$  の役割を入れ替えることにより  $\text{rank}_2(AP) \leq \text{rank}_2(A)$  が得られるので証明は終わる。 ■

定理 3.7 の証明 命題 3.5 より行列  $A$  に対し基本行列  $P_1, \dots, P_t, Q_1, \dots, Q_s$  が存在して

$$A = Q_s \cdots Q_1 A_0 P_1 \cdots P_t$$

と書ける。ただし  $A_0 = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$ 。この時  $\text{rank}_1(A) = \text{rank}_1(A_0) = r = \text{rank}_2(A_0) = \text{rank}_3(A_0)$  が成立する。補題 3.9 を順に適用することにより

$$\text{rank}_2(A_0) = \text{rank}_2(AP_1) = \cdots = \text{rank}_2(AP_1 \cdots P_t) = \text{rank}_2(Q_1 AP_1 \cdots P_t) = \cdots = \text{rank}_2(A)$$

を得る。 $\text{rank}_3(A)$  についても同様にできるので O.K. ■

正方行列に関して階数と正則性の間には次の関係がある。

命題 3.10  $A$  が  $n$  次行列のとき,  $A$  が正則 (逆行列を持つ) である必要十分条件は  $\text{rank}(A) = n$  である。

証明  $A = (\mathbf{a}_1 \cdots \mathbf{a}_n)$ ,  $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$  とする。

$A$  が正則のとき  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$  が 1 次独立である事を示せば,  $\text{rank}(A) = n$  が分かる。 $x_1 \mathbf{a}_1 + \cdots + x_n \mathbf{a}_n = \mathbf{0}$  が成立しているとする。このとき  $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$  なので  $A^{-1}$  を両辺にかけると  $A^{-1}A\mathbf{x} = A^{-1}\mathbf{0}$  より  $\mathbf{x} = \mathbf{0}$  が分かる。

$\text{rank}(A) = n$  とすると  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$  は 1 次独立である。このとき  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$  はベクトル空間  $K^n$  の基底である。このとき任意のベクトル  $\mathbf{b}$  に対しスカラー  $x_1, \dots, x_n$  が存在して  $\mathbf{b} = x_1 \mathbf{a}_1 + \cdots + x_n \mathbf{a}_n$  と書ける。特に  $\mathbf{b}$  として基本ベクトル  $\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_n$  達をとってくる。即ち各  $i$  ( $i = 1, \dots, n$ ) に対しスカラー  $b_{i1}, \dots, b_{in}$  が存在して  $\mathbf{e}_i = b_{i1} \mathbf{a}_1 + \cdots + b_{in} \mathbf{a}_n$  が成立する。 $B = (b_{ij})$  とおいて行列で書き直すと  $E = BA$  を意味している。よって  $B$  は逆行列<sup>(1)</sup>。 ■

演習問題 3.5 次の行列の階数を求めよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 \\ 5 & 6 & 7 & 8 \\ 9 & 10 & 11 & 12 \\ 13 & 14 & 15 & 16 \end{pmatrix}$$

$$(2) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & 1 \\ 2 & 3 & 2 & 3 \end{pmatrix}$$

$$(4) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 & 4 & 5 \\ 1 & 0 & 1 & 0 & 1 \\ 2 & 0 & 2 & 0 & a \\ 1 & 0 & 1 & 0 & b \end{pmatrix}$$

<sup>(1)</sup>本来なら  $AB = E$  も示す必要がある。実は  $BA = E$  から  $AB = E$  が出て来るのだが, これは次の章で扱う。